

空から博物館へ ―一九六〇〜七〇年代の凧の愛好者の活動―

セシル・ラリ

和凧の黄金時代は一八世紀の終わりに始まり、二〇世紀半ばに第二次世界大戦が日本の文化的景観を変えてしまうまで続いた。実際に、戦争中、凧を作るために必要な材料の和紙は見つけにくくなって、いくつかの凧製作者（例えば、一九二二年東京生まれの小野孝巳）は戦争に召集された。戦後の復活にもかかわらず、一九六〇年代、和凧の衰退が始まった。同時に起こったいくつかの要因が考えられる。まず、都市の復興に伴って、建物は高く、通りは狭くなり、電線が張り巡らされたため、凧をあげる場所がなくなった。こうした物理的な制約に、ある文化的現象が付け加わった。敗戦後アメリカの占領が始まってから、新しいおもちゃが輸入されて、日本のおもちゃに影響を与えた。また戦前は、たとえば瀧廉太郎（一八七九〜一九〇三）が作曲した学校唱歌「お正月」（一九〇〇年）や同じ頃の『尋常小学読本唱歌』の「たこのうた」のように、子どもたちの正月の凧揚げを題材にした歌が多く作曲されたが、戦後、新しく輸入されたクリスマスの曲もよく歌われるようになった。最後に、ハイテクなおもちゃの開発が進み、木や和紙で作られた伝統的なおもちゃは、子どもたちにとって、古臭いつまらない物になり、その存在すら子どもたちには忘れられてしまった。

東京・日本橋にある凧博物館の創設者の茂出木心護（一九一一〜一九七八）は、一九七七年一月一日に行われた博物館の開館式での口上で、友人のデザイナー鳥居敬一から聞いた話

をもとに、和風文化の衰退を語っている。東京を歩いていたときにすれ違った男の子が、奴ヤコ風を指しながら、母親にこれは何かと聞いていた。母親が答えても、男の子は理解していないようだった（『にほんばしのぞき眼鏡 ついこのあいだ下町の風景―「たいめいけん」の洋食と風』）。奴風は東京で典型的な形の風なのだが、戦後三〇年もたたないうちに東京の子どもたちはそれが何かわからなくなってしまうのである。日本の風文化の衰退を目の前にして、風の黄金時代を子どもころ経験していた何人かの愛好者は、この文化を保存する活動を始めた。

最初のコレクション、最初の本、最初の博物館・アマチュアたちの活動

風文化が衰退し始める前から、風の収集家は存在していたが（例えば、茂出木心護は子どもころから風が大好きだったので、一九二〇年代後半から収集を始めた）、日本に現在所蔵されている風のほとんどは、戦後に収集されたものである。たとえば今日法政大学博物館に所蔵されている二つのコレクション、つまり、風に情熱を注いだ実業家の比毛一朗（一九二二～二〇〇三）のコレクションと、東京にある民芸の専門の備後屋の創設者の俵有作（一九三二～二〇〇四）のコレクションが挙げられる（前者は風を一九九五点、道具とおもちゃを一六三点、浮世絵と風絵を五三二点含む）。収集の際、茂出木心護、比毛一朗、俵有作は三人とも同様のアプローチを行った。日本全国を旅して、各地域の風と風絵の目録を作成したのである。このアプローチは以前から活動していた日本の郷土玩具の団体と、戦前に柳宗悦が始めた民藝運動のアプローチを採用したのである。風は郷土玩具のサブカテゴリーに属し、風の愛好者が組織される前に、郷土玩具の団体はいくつかの調査を行っていた。そして、郷土玩具は民芸のサブカテゴリーと考えられる。しかし、郷土玩具（風を含む）と民芸についての研究は、日本

において最初全く別々に発展していったように見える。

俵有作のコレクションの大部分は一九六三年に短期間で収集されたものだが、当時の日本の風文化の全体像を手渡してくれる。当時俵有作は八か月で全国の数多くの工房を訪れ風を収集した。そして翌年、初めての和風の目録を作成するため、収集した三〇〇点を、六三のカラー図版で紹介する『日本の風』（美術出版社）を出版した。その本は、日本の伝統的な風が地域によって豊かな多様性を持つことを、初めて明らかにした。それまで、風の製作者と愛好者が知っていたのは、主に自分たちの街、あるいは近隣の街の風であり、多種多様な風が存在することの重要性に気づいていたものはほとんどいなかった。それまで風の歴史に関する本は西洋的な歴史に対応し、日本の独自性に対する配慮に欠けていたが、この最初の和風についての本は、東京に住んでいた茂出木心護や比毛一朗のように、彼と同時代の愛好者やコレクターにとっても、後の大阪に在住の木村薫（一九四八〜）や白根在住の巻口厚志（一九五六〜）にとっても、モデルになった。現在、木村コレクションは大阪歴史博物館に保存され、巻口コレクションは自宅に保存されている。

日本の伝統的な風の最大のコレクションは、おそらく一九二〇年代後半に茂出木心護が始め、現在は彼の息子茂出木雅章（一九三九〜）が引き続き収集を続けるコレクションであろう。このコレクションの図録が出版されたにもかかわらず、現時点で正確な目録がない。しかし風博物館で働いている福岡正巳（一九五七〜）の概算によれば、博物館には三〇〇から四〇〇の風が展示されているが、風コレクションの大部分がストックルームに保存されている。このコレクションには、他にも五〇点以上の浮世絵やいくつもの道具が含まれている。卓越した料理人でありレストラン経営者である茂出木心護は、風の愛好者、収集家であり、風の

愛好者たちのパトロンでもあった。彼の興味の中心である、美食と凧は不可分なものとなった。一九四八年に、洋食専門店の「たいめいけん」をオープンした。東京・日本橋（現在、野村ビル）に位置するこのレストランはすぐに、彼が収集した凧の展示場所となった。また、生活に苦しむ凧製作者を助けるため、例えば、東京の凧製作者橋本禎造（一九〇四〜一九九一）に毎年千支の凧を依頼し、一五〇〇円で仕入れて、一〇〇〇円で「たいめいけん」で売っていた。

そして一九七六年に茂出木心護は日本橋（たいめいけんの現在位置）に新しい六階立ての建物を建てた。四階までは自分のレストランにあて、五階と六階はオフィス用に貸すことを計画していた。しかし、借り手を見つけられず、自分の凧コレクションがあまりにも膨大になり自宅で保存することが困難になったので、結局「たいめいけん」の五階を凧博物館にすることに決めた。その際、六五歳の茂出木心護は健康上の問題を抱えていて、入院を繰り返していた。その結果、日本の凧の会のメンバーの友人にこのプロジェクトの実現を託さざるを得なかった（茂出木心護「凧の博物館うらな」『日本の凧の会会報』第一四号 一九七八年二月 二頁）。一年間ほどの準備の後、一九七七年一月一日に日本の凧の会のメンバーだけでなく、いくつかの新聞や放送の記者も取材に訪れた最初の凧博物館の開館式で、茂出木心護は赤と白の凧の尾をカットした（図1）。それは、日本だけでなく世界で最初の凧博物館であった。それ故、この博物館の開館は日本人だけでなく、外国人にとっても日本の凧の再評価における重要なステップであった。

日本の凧の会の作成

活動を組織するために、凧愛好者の小さなグループはレストラン「たいめいけん」で茂出木



図1 茂出木心護「風の博物館うら嘶」
『日本の風の会会報』第14号1978年2月p.3

心護と俵有作と斎藤忠夫（一九一九～一九九三）を囲んで定期的に会うようになった。その会合は当初非公式なものであったので、それがいつ始まったのかを明らかにするのは難しい。しかし、俵有作のリーダーシップの下で活動を公式なものにするため、このグループは「日本の風の会」（一九六九年一月二二日）を設立した。設立者は、俵有作、茂出木心護、斎藤忠夫、松沢一雄、小島正男、三浦利男、森康助、広井力（一九二五～）、島田喜一郎、佐藤英博、橋本禎造、越田建嗣、藤井敬子、多田福男、比毛一朗の一五名である（『当会発足五週年にあたって』『日本の風の会会報』第八号一九七四年二月 三六頁）。設立のころ「たいめいけん」で撮影された記念写真（図2）には風の会のいくつかのメンバーの顔を確かめられる（後列左から）…佐藤英博、不明、不明、茂出木心



図2 凧の博物館所蔵

護、斎藤忠夫、俵有作、広井力、多田福男・
 (前列左から) …不明、橋本禎造、森康助、
 三浦利男、島田喜一郎、比毛一朗である。会
 の設立のため主導的な役割を果たしたにも
 かかわらず、俵有作は茂出木心護に凧の会の
 活動を任せることにした。実際、「たいめい
 けん」レストランは凧の会の活動の拠点で
 あって、茂出木心護は日本の凧の会の活動の
 ための資金の多くを出していた。茂出木心護
 は一九七八年六月一日に亡くなるまで凧博
 物館の館長を務めた。彼の死後は、息子の雅
 章が館長職を引き継いで、日本の凧の会の会
 長に任命された。

公式に設立されたにもかかわらず、当初、
 会費や会則もなかった。とはいえ、メンバー
 の活動は非常に活発であった。設立以来、日
 本の凧の会は毎年三度全国凧揚げ大会を開
 催し(一月二日、五月五日、十一月一日)、
 一九七一年からは、一年二回『日本の凧の会
 会報』を発行し続けている。その会報は、メ

ンバーによって、メンバーのために、書かれている。記事には、日本の風の様々な作成方法、揚げる方法を説明したもの、国内外の風のイベントのレポート、和風の歴史についての調査などがある。当初一五人だった日本の風の会のメンバーは、一九七〇年代と一九九〇年代の間に徐々に数を増した。茂出木心護は日本橋の風博物館の開館によって日本の風の会が注目を集め、会員数が増加したと証言している。風博物館に来館の際に、風の会に入会するものも数多くいた。しかし、その後、会員数は減少し始め、二〇一六年七月現在、九八〇人である。

日本の風の会の創立後に、郷土玩具の団体はそれまで行っていた風の研究をすべて日本の風の会に任せることになった。こうして、日本の風の会の創立は、郷土玩具の中で特定のジャンルとして風を確立し、伝統的な日本の風の再評価を進める上で大きな役割を果たしたのである。

著者は原稿の執筆に際して松井久氏、『日本の風の会会報』編集長の伊地知英信氏の協力に感謝する。

参考文献

- 茂出木心護「風の博物館うら嘶」『日本の風の会会報』第一四号 一九七八年二月 二〜四頁
「当会発足五週年にあたって」『日本の風の会会報』第八号 一九七四年二月 三六頁
伊地知英信(編)『にほんばしのぞき眼鏡 ついこのあいだ下町の風景―「たいめいけん」の洋食と風』たいめいけん 二〇〇九年
俵有作『日本の風』美術出版社 一九六四年
比毛一朗『風大百科日本の風・世界の風』美術出版社 一九九七年

(パリ・ソルボンヌ大学／博報財団招聘研究者／国際日本文化研究センター外国人研究員)